

○ 遠つふやのふやや植まけむ山梨の
つ ね を

岡べゆたけし其のえびかづら。

みづくし葡萄葉かげに光みちて

詩神奏づらしここ平和の譜。

小さき規の嘆つ世ならじ此の秋ゆ

葡萄片野に人をし待たむ。

ひと房とぶだうに足りてひと日我が

邦をふもふの友と語らまし。

つらかりし別れよさては曉を

葡萄のかげに星透しみつ。

フレーベル會俳句端書集

一、課題 夷講、鉢叩、水仙、山茶花、千鳥、

各二句宛

一、べ切 十月二十五日限り

一、披露 十二月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にも投吟すること

を待用紙は可成繪端書に限り（眞筆刷

物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野 奇 零 宛

第三回俳句端書集

落栗や汲まぬ古井を覗く人 長野 飯塚 曉霞

祝捷に新酒一斗の小村かな 同

撞き捨てる鐘に寂わり秋の夕 同

松風や水の上行く秋の色 仙台 立花 一瓢

落鮎や舟底さしる隠れ岩 同

富士の根を迂る夕日や稻の花 同

湖に捨てた様なり後の月 同

美しく世を隠れけり菊の主 同

鹿啼くや小倉の山の夕月夜 武州 桑田 日本子

聞く方にやがてうつるや秋の聲 同

名の知れて見方のある角力哉 同

番小屋に假寢の夢や鹿の聲 沖繩 上地まかと

日當りに所も更へす秋の蝶 同

朝雨に半ば伏しけり女郎花 同

月と露抱えて萩の白さかな 神奈川 樂天堂 學洋

蔓引けば隣も動く糸瓜かな 同

重さうに風の動かす糸瓜かな 東京 久米 辰子

長き夜や宵から雨の同じ音 同

秋雨やつくくと子のほしうな 同

氷屋の芋屋と化けて秋の風 可

落しけり神に誓ひし水ながら 同

討死の遺骨届きぬ秋の暮 薩奥 花松 曉星

歸省して笛の稽古や夕納涼 丹波 廣野 奇骨

出来稻に又も編足す俵かな 丹波 八木 可笑

朝顔の種取る庭や赤蜻蛉 同

夕榮や土堤を境に赤蜻蛉 神奈川 星野 秋月

秋風や半ば没した艦の旗 秩父 青葉 高歳

花賣や花に似た子のしほらしき 同

今はねた小豆の莢や秋夏さ 埼玉 月田 一甫

笑はるゝ瓢を種に残しけり 同

忠助と名も言ひさうな草人哉 神奈川 杉崎 雲濤

進軍の後ろにしたり雲の峰 同

子子の浮きつ沈みつ旅順港 同

萬歳の聲に晴れけり朝の霧 大阪内田 樵夫

夕月や青田万頃水満々 同

三光

人、籠城に宵々淋し虫の聲 陸奥花松 曉星

地、富士の根を迂る夕日や稻の花 仙台立花 一瓢

天、消えかゝる露に香の立つ黄菊哉 東京樂天堂學洋

追加

無一庵奇零

力なき扇の骨や秋暑し

物訪へば吠えつく犬や秋の暮

貸家の庭や秋立つ草の丈

行秋や片足折れしきりくす

夏瘦に男泣かせて罨かな

落城の跡寒げなり秋の風

戦止みし屍の上や月の雁

信州の秋

小林雨峰

(一)

熊ヶ谷の土手の櫻葉大方は枯れて、盡ばみたるが、飄々と亂れ散りぬ。秩父の山を見るに、山の頂は一刷毛さつとはきたるが如く、山の腰より下は深き靄にてぼかざる。天上の雲は霽れんとして霽れず、猶は雨を含み、彼處は白く、此處は灰色に、さては鼠色の濃さを交えて、雲脚ところ／＼繁し。

高崎に來れば、老嫗老爺の一群にて、一室は溢れん斗りの人込みとなれり、寸の餘地だもなし。思へば今日は彼岸の中日なり、皺くちやの老婆、